

【花山天皇】(1) 永観二年（九八四）、円融天皇の譲位により、花山天皇（九六八～一〇〇八）が十七歳で即位した。右大臣兼家にとっては血のつながりのない帝である。一方、東宮（皇太子）には兼家の外孫の懐仁親王が立てられた。在位二年、帝は最愛の女御低子（弘徽殿の女御、藤原為光の娘）に先立たれ、悲しみのあまり出家退位を決意した。

（世継）「次の帝、花山天皇と申しき。冷泉院第一の皇子なり。御母、贈皇后宮懷子と申す。太政大臣伊尹のおとどの第一の御女なり。（中略）

寛和二年丙戌六月二十二日の夜、あさましくさぶらひしことは、人にも知らせさせたまはで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせたまへりしこそ。御年十九。世をたもたせたまふこと二年、そのち二十二年はおはしましき。

あはれなることは、おりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせたまひけるに、有明の月のいみじくあかりければ、「顕証にこそありけれ。

いかがすべからむ」と仰せられけるを、「さりとて、止まらせたまふべきやう侍らず。神璽・宝剣わたりたまひぬるには」と、栗田殿の騒がし申したまひけるは、

まだ帝出でさせおはしまさざりける先に、手づからとりて、春宮の御方に渡し奉り給ひてければ、帰り入らせたまはむことはあるまじくおぼして、しか申させたまひけるとぞ。

さやけき影をまばゆくおぼしめしつるほどに、月のおもてにむら雲のかかりて、少しくらがりゆきければ、「わが出家は成就するなりけり」とおぼされて、歩み出でさせたまふほどに、弘徽殿の女御の御文の、日ごろ破り残して、御目もえはなたずご覧じけるをおぼし出でて、「しばし」とて、取りに入らせおはしまししかし。栗田殿の、「いかにかくおぼしめしならせおはしましぬるぞ。ただ今過ぎさせたまはば、おのづから障りも出でまうで来なむ」と、そら泣きたまひけるは。

- 〔注〕○伊尹——九二四〜九七二。師輔の長男（兼家の長兄）だが、早くに亡くなった。
- 寛和二年——九八六年。 ○花山寺——元慶寺の異称。今の京都市山科区にある寺。
- 顕証——あらわで目立つこと。 ○神璽・宝剣——三種の神器のうちの勾玉まがたまと剣。
- 粟田殿——藤原道兼（九六一〜九九五）。兼家の三男で、このとき蔵人として帝に近侍していた。 ○春宮——懷仁親王やすじし。後の一条天皇（九八〇〜一〇一一、在位九八六〜一〇一一）。円融帝の皇子で、母は兼家の娘詮子せんし。

【語彙・文法】（○＝語彙・●＝文法・☆＝常識。ただし重なるところも）

- あさまし ○みそかなり ○世をたもつ ○おる ☆有明の月 ●いかがすべからむ
- さりとて ●止まらせたまふべきやう ●おはしまさざりける先に ☆春宮（東宮）
- あるまじく ○さやけし ○影 ○まばゆし ●成就するなりけり ○破る
- えはなたず ○おのづから ●まうで来なむ ○そら泣き

【問い】

- ① 点線部1「そのち二十二年はおはしましき」とはどういうことか。指示語の内容を明らかにして答えよ。

- ② 二重傍線部a〜cの助動詞の文法的意味を答えよ。

a 「べから」

b 「べき」

c 「まじく」

- ③ 点線部2とあるが、粟田殿（道兼）が帝をせき立てたのはなぜか。

- ④ 点線部3を品詞分解して現代語訳せよ。

わ が 出 家 は 成 就 す る な り け り

- ⑤ 点線部4「いかにかくおぼしめしならせおはしましぬるぞ」とはどういうことか。

【現代語訳】

「次の帝は、花山天皇と申し上げた。冷泉院の第一の皇子である。母上は贈皇太后宮懷子と申し上げる。（懷子は）太政大臣伊尹のおとどの長女である。（中略）」

寛和二年丙戌六月二十二日の夜、驚きましたことは、（花山帝が）人にもお知らせにならないで、ひそかに花山寺にいらっしゃって、御出家入道なさったことだ。御年十九歳。（帝位について）世をお治めになること二年。その後二十二年は長生きなさった。

胸にしみることといえ、退位なさった夜は、藤壺の上の御局の小戸からお出になったが、有明の月がひどく明るかったので、（帝が）「まる見えではないか。どうすればよいのだろう」とおっしゃったのに対して、「そうだからといって、ご中止になることができる（なさつてよい）ことではございません。神璽も宝剣も（東宮のもとへ）おうつりになってしまったからには」と、栗田殿（道兼）が（帝を）せき立て申しなさったのは、まだ帝が（清涼殿を）脱出なさらないうちに、（道兼）自身の手で取り出して東宮の方へ渡し申し上げてしまっていたので、（帝が）再び（宮中に）お戻りになることはあつてはならないと思ひになって、そのようにお申しになったとかいうことだ。

明るく澄んだ月光を（帝は）気がひけるものとお思ひになっていたところ、月のおもてに群がった雲がかかって、少し暗くなつていったので、（帝は）「私の出家は成就するのであった」とお思ひになって、（宮中から）足をお踏み出しになるときに、亡き弘徽殿の女御からのお手紙で、平素破り残して取っておき、いつも目を離すことができないほどご覧になつていたものをお思ひ出しになって、「しばし待つてくれ」と取りにお入りになつたのだ。栗田殿は、「どうしてそのような（未練がましい）お思ひになつてしまわれるのです。たつた今、この機会を逃せば、自然と（出家の）障害も出てまいることでしょう（帝の出家へのご決意は、そんなものだったのですか）」と、うそ泣きをしなさつたのだ。

【参考】『古今著聞集』卷十三より

さてもかの帝、世をそむかせ給ふ事のおこり、いとあはれにかなし。法住寺相国の御女、弘徽殿女御とてさぶらはせ給ひけるが、かぎりなく御心ざしふかりけるにおくれさせ給ひて、御なげき浅からず。世の中心ぼそく思ひみだれたりける頃、栗田の関白、いまだ殿上人にて蔵人弁と申しけるが、扇に、

妻子珍宝及王位 臨命終時不隨者

といふ文をかきてもたれたりけるをご覧ぜられけるよりこそ、いとど御心おこりにけれ。この世のたのしみは夢まぼろしのほどなり。国王の位よしなど思しとりて、たちまちに十善の王位をすてて一乗菩提の道に入らせ給ひにけり。

すでに内裏を出でさせたまひける夜、寛和二年六月廿三日なりけり。在明の月くまなかりければ、いかにぞや御心地のおぼえ給ひて、立ちやすらはせ給ひけるに、をりしもむら雲の

月にかかりければ、「我が願すでに満す」とてぞ、貞観殿の高妻戸より、をどりおりさせ給ひける。それよりぞ、かの妻戸はうちつけられにけるとぞ。

〔注〕○世をそむく——出家する。 ○法住寺相国——藤原為光。相国は太政大臣のこと。

○心ざし——愛情。 ○おくる——先立たれる。 ○妻子珍宝及王位——だいほうどうだいじきょう『大方等大集經』

にある句。意味は訳を参照。「唯戒及施不放逸 今世後世為伴侶」と続く。 ○よしなし

——とるに足りない。 ○十善の王位——帝位。帝王の身に生まれるのは、前世で十の善行

を積んだ功德によるものとされた。 ○一乗菩提——ただ一つの悟り。仏の教えのこと。

○六月二十三日——『大鏡』と一日異なる。 ○妻戸——両開きの板戸。

【参考の訳】

それにしてもその花山天皇が、世を捨てて出家なさった事のきっかけは、とても胸にささり悲しいことである。法住寺の太政大臣（為光）の御娘が、弘徽殿の女御（祇子）と申して帝にお仕えしなさっていたが、この上なく帝がご愛情を深く注いでいらしかった、そのお妃に先立たれなさり、帝のお嘆きは深いものであった。世の中のことが頼りにならず、お心が乱れていらしかったときに、栗田の関白（道兼）が、まだ殿上人で藏人弁と申しいていたが、その扇に、

「妻子も財宝も、帝王の位に至るまで 命の終わりの時には随わぬ

（戒を保ち施しをし罪を犯さぬことだけが 今世と来世の伴となる）」

という経文を書いてお持ちになっていたのを、（帝は）ご覧になったときから、ますます出家へのご決意を固められた。「この世の楽しみは、夢まぼろしの間のことだ。帝王の位など意味がない」とお悟りになって、ただちに十善万乗の帝位を捨てて、一乗菩提の仏の道にお入りになってしまわれた。

帝が内裏をお出でになった夜は、寛和二年六月二十三日であった。有明の月がくまなく照らしていたので、どうしたわけか弱気になりなさって、ためらいなさったが、ちょうどその時むら雲が月にかかったので、「私の願はすでに成就した」と、貞観殿の大きな妻戸の所から、地面に飛び降りなされた。それ以来、その妻戸は打ち付けられ、開かずの戸となったという。

